

「亀」は我が命の守り神

福岡県 永尾 清人

時は昭和十四年の秋、徴兵適齢期に達した私は、男子国民の義務である徴兵検査を受けた結果、第一乙種五〇番であった。当時は甲種に合格できないことは男子の恥辱であり、だれにも話すことなく昭和十五年の新年を迎えたのである。

甲種合格者は、次々に現役兵としてそれぞれの部隊に入隊、歓呼の聲に送られて勇躍任地に向けて出発していった。一月も終わり、二月も半ば過ぎたころ、現役としての入隊通知を受けた。ここで初めて男子たるの面目を保つことができた。

私は三男坊の独身であり、いずこで果てようとも身は軽い。六年間勤めた鉄道会社社会計係の整理も終え、親族、会社、地元の人々にあいさつ回りを行い、後顧の憂いなく、天満宮境内で見送りの人々と訣別の言葉

を交わし、勇躍して仕途に就いたのである。

集合は「宇品港」となっている。既に戦禍は中国全土を覆い、行く先は皆目見当がつかない。支給される軍服が夏物か冬物かでおよその判断がつくが、そんなことはどうでもよい。ただ一意専心、国家のため軍務に精励することのみであると、固い決意を胸中に秘めていた。

父は我が子の最後の見納めと思ったのか広島の子品港まで見送りにきてくれた。父も第一次世界大戦で一兵卒として青島攻略戦に参加し、勲八等白色桐葉賞の受賞者である。父はいうに何もうことはないが病気をしないよう気をつけて頑張ることだけだと、そんなことで、前夜は宮島の「亀谷旅館」で一夜を過ごした。翌朝は早々に旅館を出発、宇品に向かい、軍より指定された宿舎につき、簡単な身体検査があり、冬服と外套が支給された。そこで北方行きは間違いないと思つた。

すると突然、「おいっ、黙って聞け、俺はお前たちを受領にきた佐々木曹長だ。いまから名前を呼ぶから

返事せい」といつて次々に呼び出された。そして一班、二班と六個班に分けられ、それぞれ班長を指名された。私も第三班長を命じられたが、初めてのことで、班長とはどんな任務があるのか全く見当がつかない。

同僚に尋ねたところ、人員の掌握じやないかという。やはり同僚がいったとおりであった。同僚は青年学校で軍事訓練を受けており、多少軍隊の知識があり、要領を心得ていたようである。毎朝人員点呼がある。第何班〇〇以下総員何名、事故何名、現在何名、事故の内容は何々、異状ありません、と報告する。その要領を曹長殿が説明するが、東北のズウズウ弁で全く分からない。大方そんなことだろうと半信半疑ながら分かったような顔で、ハイと返事をする。しばらくして宿舎を出発、引率されて宇品港岸壁についた。約一千人以上はいたであろう若い壮丁が集結した。集団心理というか何者も怖れない勇気がわいてきた。

ダイハツに分乗し、港内に停泊する黒い貨物船（輪送船）に移乗するところには、拡声器を通して絶え間なく軍歌が流れていた。

あ、大君に 召されたる

命はえある 朝ぼらけ

称えて送る 一億の

歓呼は高く 天をつく

いざ行け^{わしも}兵 日本男児

いまでもこの感激は忘れない。これで故国も見納めかと思つた瞬間、目頭が熱くなり感激の涙が頬を伝つて流れた。

たとえ軍務に服したからといって必ず戦死するとは限らない。誠心誠意軍務に精励して再び職業に励むことも国家に対するご奉公に変わりはない。「亀」は目出たい長寿の象徴だ、亀谷旅館に当初宿泊の縁があつたのは生きて帰れる幸運の兆候かもしれないなどと勝手に想いを巡らし、悲痛な決意の中に万感無量の思いであつた。

船室は三段に仕切られ、全く貨物同様の詰め込みようで、とても外の景色など見られるものではない。いつの間に出港したのか船は波を切つて全速で突き進んでいるようである。時間が経つにつれて兵員の船酔い

は激しくなり、その大半が苦しんでいた。

無我夢中で長い長い時間の中で高波の上に乗り上げ、奈落の底に叩きつけられ、船はエンジンの音をゴウゴウと響かせながら進んで行く。何時間を経過したか、船は停船したらしい。静かになり、どうなったものかと思つていたら下船命令が下つた。携行品を整え上陸したところ、ここは大連港埠頭だということである。時候は三月になろうとするところで、その寒さは途轍もない厳しさであり、顔や手が痛い。地面は凍結してツルンツルンで歩けない状態である。そのまま有蓋貨車に乗せられた。まるで荷物同様である。

初めて見る人の姿、言葉、服装、風景、ことごとくがびつくりするものばかり、初めて見る異国に半ば哑然としていると、列車はいよいよ出発することになり、鉄の扉が閉められ、しばらくして列車は動きだした。貨車には窓がなく、扉は解放厳禁、どこをどう走っているか皆目見当もつかない。そつと隙間から外を覗けば、広漠たる原野だ。疲れて眠りにつき、一夜明けても列車はまだ走り続けている。しばらくして列車は止

まつたが、何の連絡もない。何だろうと隙間から外を見れば駅のホームである。表示板に「大石橋」とある。ああここが歴史で習つた有名な大石橋かと感無量であった。後で分かつたがそこで第四中隊所属の兵員が降車したそうである。列車はまた走り出し数時間の後ふたたび停車した。寒さはさらに加わり、体に力を入れないと震えが止まらない。

突然扉が開いて、伍長殿が乗り込んできた。「ここはどこですか」と問うと、奉天との答えであった。そこで各人に防寒外套が支給された。雑誌で見た敵中横断三百里に掲載されてあつた絵にそっくりの内側にフサフサの獣毛のある暖かい外套だった。列車は三度発車した。奉天には大隊本部と第二中隊が駐屯しており、その第二中隊配属の兵員が降りたそうである。

車内で伍長殿が、俺はお前たちの内務班長であり、初年兵教育の助教である。これからしばらくお前たちの面倒を見ることになる。その態度は毅然たるものであり、我々も身の引き締まる思いであつた。伍長殿も故郷を出て三年、盛んに内地の状況を聞きたがつてい

た。「これから自分たちはどこまで行くのですか」と質問すると「四平街」だと答える。主要都市名は知っているが、四平街とは初めて聞く地名であり、相当の田舎だろうと想像する。班長は青森県出身のズウズウ弁がひどく、言葉が難解である。

何時間かして列車は停車した。下車だといわれて班ごとに列を組み駅前に整列すれば、白タスキ姿の多数の国防婦人会の人々から大歓迎を受けた。異郷の地で日本婦人を見て、平和な田舎街だなあと安心したものである。

兵舎まで隊列を組み、総員八四名は凍結していて転びそうな道路を無事部隊兵舎に到着することができた。

着いた部隊は「関東軍独立守備隊・第一大隊・第一中隊の落合部隊」である。まさに一の一の一の歩兵中隊であった。家を出て十日あまり、三月一日の晴れの入隊式に参列することができた。歩兵中隊といっても軍馬も軍用犬も軍用鳩も配属してあった。兵隊は歩兵砲班、重機関銃班、擲弾筒班、小銃班に分かれており、自分は軽機関銃班に所属した。班長は山崎喜三郎伍長

殿である（現在も青森県弘前市に健在である）。その後、毎日毎日、極寒酷暑を問わず訓練、学科教育が施行され、一期の検閲が終了するや、約半数の四十名は引き続き上等兵候補としての特別訓練が続いた。上等兵候補の検閲がすみ、分遣、派遣、警備の任に当たるや十四人が榮えて上等兵を命じられた。このときほど嬉しかったことはない。このことは軍隊生活の経験者でないとは分らないと思う。

一年後の昭和十六年には奉天に移駐、五月二十日は奉天を出発、北支天津に転戦、西部冀東肅正作戦に参加、玉田県、大佛頭付近で戦闘、このとき中隊から数人の死傷者が出た。

第一小隊長榎倉中尉負傷するや、間髪を入れず指揮班長山崎軍曹は「爾後小隊の指揮は山崎軍曹がとる」と大声を発して、すかさず小隊を掌握し戦闘を継続した。このようにして三カ月間は毎日が行軍・戦闘の繰り返し、時には驟雨の中に眠り、墓地に宿泊し、敵と対峙し、昼夜の別なく追撃、攻撃をかけた。

かくして服はボロボロ、髪は伸び放題、缺みで髭を

摘んだら、小隊長いわく「永尾上等兵は髭を手入れしたな」とヒヤカス。あご髭は掴めるほどに伸びていた。砲声は昼夜絶え間なく、迂闊な行動は許されない。その間、先兵分隊に加わり敵状偵察をする。そのときは敵の小部隊と戦闘することも再々である。夜間前線の歩哨に立つとき、あるいは伝令に飛ぶときなど、寸分の油断もならない。

支那事変の戦局はいよいよ拡大し、他の方面軍は南方仏印に進攻した。そのころ編成替えのためか部隊は北支の天津に集結して、反転して原隊の奉天に引き揚げ、待機することとなった。

その後、南満州方面の警備に従事中、予備主計の募集があり、中隊長に薦められてこれに応募することとした。志願者二十名中二名合格、以後主計の教育訓練を受けた後、予備主計下士官適任者として昭和十八年五月、満期除隊となった。その後部隊は、間もなく南方のポナベ島に転進したそうである。

郷里に帰還してからは、入隊前に勤めていた鉄道会社に復職し、軍隊の厳しい生活体験を生かして懸命に

頑張った。その間、養子縁組、結婚などの話もあったが、時局柄一切を断わり、再度の召集・従軍に備えた。案にたがわず昭和十九年五月五日夜、臨時召集令状を手にした。もう軍隊生活に憶することなく堂々と自信をもって出征の途に就いた。

召集部隊は久留米第五十二部隊である。再び天満宮で地元民の歓送を受け、勇躍して出発した。

当時のわが家は、二人の兄は応召して戦地にあり、一人の弟も既に海軍現役兵として近日入団することが決まっていた（終戦一週間前に戦死）。

今回は、久留米第五十二部隊には単独で入営し、翌日には広島にある暁第二九四〇部隊船舶本廠に転属命令を受け、久留米を出発した。応召者は全員で十一名、内一名は本科の将校、他の十名は予備主計下士官である。

予備主計下士官十名が一度に召集されることは相当の大部隊の編成かと想像した。到着指定日前日、囚らずも四年前、現役兵として出発前に泊まった宮島の「亀屋旅館」に宿泊が決められた。奇遇である。これで自

分は決して軍隊で死ぬことはないと確信した。「亀は俺の守り神だ」浦島太郎と竜宮まで乗せていったのも「亀」である。「亀」に対してはなぜか崇拜の念さえわいてくる。

話は横道にそれたが、暁第二九四〇部隊（船舶司令部）に到着、引率の将校が代表して到着申告の連絡にいった。ところが司令部の上級将校たちはだれも要請していないという。

長い時間待たされて、その挙げ句判明したのが十名で主計下士官は取りあえず、「管船部」に配属されることになった。いかに多忙といえども最も規律の厳しい軍隊の中で、このような不手際があるものかと深く考えさせられるものがあつた。かなり戦況逼迫の混乱からきたのかとさえ感じられた。

今回は全く経験のない勝手がちがう船舶經理の關係もあつて戸惑いを感じながらも、短期一週間で実務をマスターせねばならず、資料の収集などの詰め込み教育を受けた。終了後、直ちに全国に分散する。船舶徵傭班（それぞれ一人ずつ配属された。自分は大阪港第

二突提に位置する「小池少尉班」に配属されることになり、急遽着任した。以来、関東、関西、九州方面へ東奔西走の忙しさで任務を遂行した。

既に戦況は極めて逼迫した状況にあつた。その後、広島にある「船舶本廠」に転属、証憑書類の調整作業の任に当たつた。幾日かして再び大阪支廠經理部に再び転属となつた。

三日も過ぎたころ、朝から夕刻まで、終日間断なく飛来するB29艦載機の空襲攻撃にさらされ、大阪の大都市は一日にして焦土と化した。もちろん、我が隊舎も跡形もない。対抗武器を持たない我が部隊は海岸沿いで遮蔽物もない丸裸の状態でなす術もなく、雨のごとく降り注ぐ焼夷弾の中で右往左往するのみであつた。小型焼夷弾は、坪当たり二発は落ちて、地に刺さり、火を噴く。施すすべもなくただ海岸に「亀」のごとく屈むしかほかない。もうここで最後かと思つた。こんなところでくたばつてたまるかと気を奮い起こす。銃でもあつたら撃ち落としてやりたかつた。現役のときは軽機関銃手として射撃賞七枚を保持する腕には自信

があるが、口惜しい限りだ。大石橋においては射撃の特別訓練隊の教育助手をしたこともある。話題は横道に入ったが、夕刻になって幸いにして敵機は去った。幸運にも自分は無傷だ。

空襲が終わり、廠舎に帰ってみると、何もかも全焼。全財、重要書類を収納していた金庫は真っ赤に焼けて立っていた。この空襲で十数人が戦死した。翌日から部隊の移転、物資収集のため西部軍司令部、広島造船本廠との折衝で大変な苦勞を重ねた。ついに過勞による黄疸を誘発したが、休暇もとれず薬を服用しながらの激務であった。

物資受領のため広島造船本廠へ赴き、島井少佐(主計科長)に申告に行った際、少佐いわく「永尾軍曹、お前は どうして死ななかつたのか」と質問してきた。とっさに自分の口から出た返事は「ハイッ、自分」

「亀」が付いています。不幸にして死にませんでした。すると少佐は「亀」とは何のことじゃ」「ハイッ、「亀」は長寿の神です」と答えれば、少佐は「アッハッハ」と高笑いして「ウンよかつた、よかつた、そして宿泊

先はあるのか」と問われ、兵舎に泊まろうかと思いますと返事をすれば「そうか、物資の積み込みは石井曹長に指示する。終われば連絡するからお前は宮島にでもいってゆつくりしてこい」とのことであった。

そこで三度宮島の亀屋旅館に泊まることとなった(現在、亀谷旅館はないそうである)。

積み込み完了の連絡を受け、運送状を受けてお礼をかね少佐に帰阪申告をしたところ、少佐は広島もいつどうなるか分からん、頑張れよ」といって戸棚からウイスキー一本と羊羹十本の土産を差し出し、「汽車の中ででも飲んで帰れ」といつてくれた。硬骨な顔つきの少佐だが、心根は深い温情家だなあと感激したものである。

幾日かして八月六日、広島に原子爆弾が投下され、局面の深刻さは極限に到達した感じだ。八月十五日、玉音放送を出張先の船舶会社で聞き、落胆して急遽部隊へ引き返すことにした。隊内はただ茫然として放心状態である。軍属の筆生たちはすすり泣きする。空襲と警報のサイレンの音もなく、空虚な中に安堵感も漂

う。静かに過去を振り返ると、北支での戦闘、満州での猛訓練、広島での原爆、大阪での大空襲、いずれも間一髪の差で戦死をまぬかれた。これも「亀」に縁があったお陰だったのだろうか。迷信といえばそれまでだが、そんな気がしてならない。終戦後三度も職に復帰し、十五歳で就職した私鉄と通算四十二年七カ月を勤続して定年退職、その後は大川市選挙管理委員、同社会教育委員、文化センター運営委員、行政区長、公民館長代表者会長、その他諸々の役職を経て退任、その間常に軍人精神の長所を活かして己を厳しく律して、現在余生を送っております。

大空襲下の台湾防衛

戦後母と共に沖縄に帰郷

沖縄県 島袋 永進

私は昭和十六年、那覇商業学校卒業後、台湾総督府交通局鉄道部（従業員数全島四万人）に就職しました。

昭和十八年徴兵検査を受け、同年十二月に現役兵として台湾第三部隊（旧台湾歩兵第一連隊）第一中隊に入営しました。連隊は台北市内にありました。

歩兵連隊で一般中隊でしたが、教育途中より通信暗号手としての訓練も加わりました。教育期間の私的制裁の厳しさは、台湾部隊も同じように毎日繰り返されて辛い日々が続きました。幹部候補に採用され、乙種幹候となりました。

教育期間が終了するころ、部隊はチモール島派遣の下令に従い出動しましたが、派遣途中、戦局が悪化し、レイテ島作戦の打ち切りにより南方派遣命令も中断され、急遽、台湾東部海岸花連港付近への敵軍の上陸に備え、同地区の配備につくことに変更となりました。このために、チモール島への輸送途中の海難を免れたのでした。

終日低い雲に覆われている花連港の米倫山（標高二千メートルくらいか）の中腹部に、我々の拠点である堅固な坑道陣地を作るため、必死の連日連夜の強行作業が続けられました。